

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 30 年 09 月 13 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・博士課程学生
氏名	井上 漱太

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
英国、グラスゴー大学／米国、リンカンパーク動物園、ミルウォーキー大学
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
ウマ自動トラッキングソフトの開発、リンカンパーク動物園訪問、Animal Behavior Society 2018 参加・発表
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 30 年 7 月 16 日 ～ 平成 30 年 8 月 9 日
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士／〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
Dr. Colin Torney、グラスゴー大学／Dr. Stephen Ross、リンカンパーク動物園
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>1. グラスゴー大学にて共同研究打ち合わせ</p> <p>今回の渡航では、最初にグラスゴー大学を訪れた。Dr. Colin Torney 博士に会うためだ。博士はドローンを野生動物研究に持ち込んだ第一人者であり、すでにカリブーを題材にした論文を発表している。その論文の中で、ドローンで撮影した動画からカリブーを自動で識別・トラッキングするソフトを開発し、成果をあげている。2018年5月にイタリアで開催された Conference on Collective Behavior に参加した際に、博士と話す機会があり、今回の渡航につながった。私が研究しているウマでも同様のソフトを作れるか、と尋ねたところ、こころよく引き受けてくれた。今回の渡航の主な内容は、トラッキング状況の確認と論文の方向の打ち合わせだった。ドローンの動画から個体をトラッキングする際の大きな課題は、複雑な背景から個体を識別すること、ドローンの動きと個体の動きを識別できること、である。個体の識別に関してはディープラーニングを用いて、1000枚の写真からウマを学習させた。トラッキング自体は実用的なレベルまでできており、今後の成果につながると考えている。論文の方向性についても、博士はドローンだけでなく数多くの集団行動に関する著名論文にも関わっているため、有意義な議論ができた。</p> <p>2. リンカンパーク動物園訪問</p> <p>グラスゴーの次にシカゴに向かった。リンカンパーク動物園を訪れた。Dr. Stephen Ross が園内を案内してくれ、動物園に所属する研究者を集めてトークの機会をいただいた。海外の動物園自体は初めてではなかったが、米国の動物園を訪れるのははじめてだった。まず、最初に驚いたのは150周年を迎えたという歴史の長さだった。園内は清掃がいきとどき、デザインとともに、非常に整理されているという印象を受けた。その印象通り、動物が実際に生活するスペースも広く、無機質な感覚は受けなかった。日本の動物園との違いは2つ感じた。1つ目は動物目線で展示スペースが設計されていること。一頭一頭に十分なスペースを与え、それが無理なら飼育をやめるという姿勢。その言葉通り、多数の動物の飼育を諦め、他の動物園に移したとのことだった。また、複数タイプのスペースを動物に与えること。隠れたいときは隠れ、外に出たいときは出られるようにする、という試みは非常に興味深かった。お客さんが動物を見ることができなくても、ある程度仕方ないことだ、と博士は言っていた。ただ、この点はこの動物園が入場無料であることも関係しているのかもしれないと感じた。2つ目は研究者の数と研究のための設備だ。研究者の数は日本とは比にならないくらい多い。さらに、研究がスムーズに進行するよう、アプリの開発、観察用の部屋、など設備の充実度合いも抜群だった。動物園と研究というワードがすぐに結びつく土壤があるのだろう。日本の動物園もすぐに変わることは難しいけれども、徐々に変えなければいけないと強く感じた。</p> <p>3. Animal Behavior Society 2018 (ABS2018)に参加・発表</p> <p>シカゴを出て、ミルウォーキーに電車で向かった。ABS2018に参加するためだ。学会の規模としては大きくないと参加者の何人かが言っていたが、それでも大きかった。ポスター発表の数自体は日本の動物行動学会の方が多くは多いが、口頭発表の件数が多い。メインは口頭発表といった感じで、さまざまな対象種の研究が見られた。決して、自分のテーマに近い発表が多いわけではないが、違う分野でも面白い研究はたくさんある。それらから、着想を得ることもあるので、これはこれで面白い。自分のポスター発表のときには、たくさんの方が聞きに来てくれた。コアタイムの時間でも全然足りないうらだったので、楽しく時間をすごすことができた。国際学会に来ると、研究のモチベーションもあがるので、来年シカゴで開催される Behavior 2019 にも是非参加したいと思う。</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

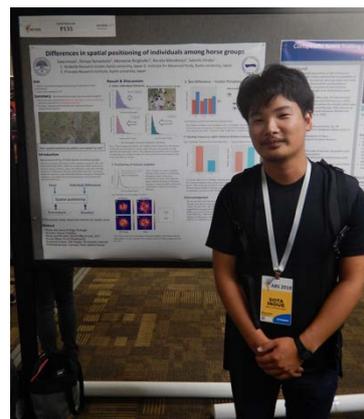
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



グラスゴー大学
動物学の建物



トラッキングの様子



ポスター発表の様子

6. その他 (特記事項など)

グラスゴー大学の Colin Torney 博士、リンカンパーク動物園の Stephen Ross 博士、Ross 博士を紹介してくれた松沢哲郎教授、渡航をサポートしていただいた PWS 支援室の方々に感謝を申し上げます。